哲學研究　第百十九號

プロテイノスとカント
宗教哲學の二つの任務

——大正十四年十一月二十八日京都哲學會講演——

波多野精一

プロテイノスの哲學はギリシア人の哲學的業績の總括りと見ることが出來るギリシアの哲學思想史に於て最も代表的な位置を占める、プラトンとアリストテレスとストアとの思想は、かれの體系を組立てる最も重要な成素をなしてゐる。かれは又、かれの時代の特殊の問題を最も明瞭に最も痛切に感得し、かれ自らの精神を以て、すべて受容れた所のものを活かした。底の知れぬ深さと透きとほるやうに澄んだ明瞭さとをあはせ具へた點に於て、かれは類ひが少い。私は今日かれについて多く語ることの出來ないのを遺憾とする。私のこの講演の任務は甚しく制限されたものである。プロテイノスの哲學の最も著しい特質が宗教的といふ點に存したこ

とに因んで、私も今日は宗教哲學の見地より論じて見たいと思ふ。が然し、かれの思想の內容の詳細は割愛して、單に全體として見ての特質、態度、方法などに考察を限らなければならぬ。さてかく考察する時、かれの宗教哲學は有力な一個の典型——タイプを代表することがわかる。私は時間の許す限り更に眼を新しき時代に向けて、このタイプとは異り、むしろそれと對立の位置を占める、他のタイプを捉へ來つて相對照せしめつゝ、宗教哲學——宗教哲學一般の問題と任務とを眺めて見度いと思ふ。

プロティノスの著書を讀んで、すべて純眞なる體驗に固有な魅力を感じない者は稀であらう。しかもかれは單に自己の體驗を語るだけで滿足して居たものでない。世の精神的暗黑を照すべき眞理の光をかゝげて、無意義なる生の巷にさまよふ世人に、向上の道を敎へて己と同じ體驗の高處に導き致さうといふのが、かれの事業の目的であつた。この點に於ては、かれはソクラテスにはじまつたギリシアの新しき哲學の精神に從つたものに他ならぬ。かれの體驗と目的とが特に著しく宗教的であつた點は、一面時代的であるが、また他の大思想家たちに對してかれの特異點であつた。かれは思想家であると同時にまた宗教家であつた。

プロティノスは向上の道を認識——眞理の認識の充實完成に求めた。これは認

識を手段と見做したといふ意味に解してはならぬ。ストアの哲學や乃至は同じく宗教的色彩を帶びた同時代の諸哲學にはかゝる傾向がまゝ著しくあらはれて居たが、プロティノスはむしろ遙かに、プラトンやアリストテレスなどにあらはれたクラシック時代の純ギリシア的精神に立ち返つて、認識及び其の完成に於て、獨立なる其自身に於て價値ある、人生の目的を見た。かくの如き實用的に他に爲めにする所があるのでなく眞理の體得其ことに滿足を求め又得るはたらきとしての認識を、ギリシア人はtheoria——理論と名けた。今理論的生活に於て人生の意義と目的とを見る哲學的態度を主知主義（Intellektualismus）と呼ぶならば、プロティノスの哲學は其の最も著しき代表者に屬する。

われ〳〵の日常の意識狀態——向上の道にのぼらぬものゝ生活——に於ては、精神は物質に囚はれ物質と混じてゐる。向上の道は解脫であり又淨化でなければならぬ。この道に於て最初の一歩を蹈み出すものは社會的道德である。更に進んだものは概念的思惟による學的研究である。これと並んで美的意識も亦感覺的存在を通じて超感覺的なるものをほの見さしめる。かれの徹底的なる主知主義に從つて、プロティノスは行爲や美的感覺までも之を認識又は思惟の變形乃至は低級の狀

態と考へた。さて認識の眞の對象は超感覺的世界である。しかして其の內容はプラトンの說いたイデアに他ならない。不完全なる認識の對象として不完全なる現象の形に於て感覺的世界に存在する凡てのものゝ本質は、全く異る眞實なる理想的なるすがたに於てこゝに存在する。こゝには又人生に意義を與へるすべての價値——智慧も正義も美も、同じく全く異る眞實なる理想的なる相に於て存在する。こゝでは「あり」Seinと「べし」Sollenとの區別は無い、むしろ最高の價値と最高の實在との完全なる一致が成り立つ。それ故にプロティノスにとつては、この世界は完全なる認識完全なる思惟其ものであつた。すなはち、こゝには下の世界に見るが如き、認識の目的と業績との間對象と作用との間又客觀と主觀との間の分離乃至不一致はあり得ない。從つて多は完全に一と合すると同時に思惟は完全に存在と一致する。かくの如き認識は思惟であると同時に直觀でなければならぬ。プロティノスは之を「ヌース」(nous)と名けた。經驗的現實とは全く特質を異にする故、後者の存在と認識との原理の役目をつとめる範疇は、このヌースには適用が出來ない。超感覺的世界は自己特有の範疇を有する。

ヌースが一切の實在を包括し同時に實在と價値との完全なる合一を示すこと、現

實世界とは全く特質を異にする――範疇までも異にする――超越的世界を意味することを考へたならば其がプロティノスにとつて宗教の對象としての神であつたことは察するに難くない。人間精神の本質とかれが考へた theoria は、眞理其ものであり又完全なる實在であるヌースに於て、わが要求に完全に適合したる對象を發見する。しかもヌース其ものが完全なる認識である以上、そこまで登り得たものは神其ものゝ生に與り得たのである。かくして、神との直接の合一を遂げるこの直觀的認識に於て宗教的體驗は成り立つ。プロティノスの生涯に意義と眞の內容とを與へたものはかくの如き宗教的體驗であつたに相異ない。かれにとつては哲學こそ宗教であつた。

尤もかれの宗教的體驗は更に稀には其の深さの極み其の高さの頂きにまで達した。思惟と存在、主觀と客觀との對應を通じて行はれた神との合一は、この二者の差別をも超越したまれに惠まれる奪魂――エクスタシスの狀態、卽ち、自己を神の中に全く投げ入れ自覺をも失つて神と全く一つになつた狀態、神となつた否むしろ神其ものであるといふ以上には形容の道なき不可思議の狀態に於てはじめて其の極致に達する。永遠の眞理の直觀の場合すでに存在した神祕的傾向はこのエクスタシ

スに於ては特に顯著である。當時地中海沿岸の諸地方を風靡した宗教運動の一般的特質――所謂ヘレニスチック世界の精神的環境――の影響はたしかにこゝにも認められねばならぬ。然しながら、エクスタンスは東西古今を通じていづこにも見る現象であり、しかも其自身としては無內容いはゞ中性的であり、心理的にはいづれも無差別といふべく、從つて、或は前提或は歸結或は隨伴者として其に結び附くもの如何によつて、はじめて特質を得來るものであるを思つたならば、プロティノスの神祕的體驗を環境のみより導くことの誤りはおのづから明かであらう。かれが人生の心髓と考へた認識は本質上多なる者に對して其を意味附け基礎附けるものとして一なる者を求める。完全なる一者に達することが認識の究極の目的である。プラトンはすでに認識と實在との對立と合一との上に立つて兩者を基礎附けるものとして、從つて其限りに於て兩者を超越するものとしての最高原理最高實在を說いた。あらゆる概念あらゆる言說あらゆる名目を超越した超實在的實在としての一者といふプロティノスの思想はかくの如き認識の究極の原理を言ひ表はしたものに他ならない。たゞかれに於ては、其は思惟の要請たるに止らず直接の體驗にまで進んだといふ特色が極めて明瞭である。かくして宗教的體驗の內容乃至對象とし

て神は二つの相に於て彼に與へられた。絶對性の點より見れば其は一者であり、實在的及び價値的內容の點より見れば其はイデアの世界卽ちヌースである。神のこれら兩面の結合はプロティノスにとつて特に困難な問題であつたらしい。

さて實在と認識との絶頂に登り着いたものは更に降り道を取らねばならぬ。哲學は第一に神の認識であるが、又それであるが故に、さらに神よりして世界を理解せねばならぬ。かくしてプロティノスの宗敎哲學は神を對象とし原理とする形而上學的體系の形に展開された。神の意志乃至活動と本質乃至意味內容との關係は如何一者はいかにして同時に多者であるか、超越的なるものはいかにして內在的となるか、現實世界の不完全性はいづこより來るか。これら並に其他宗敎形而學上の重要なる諸問題は、明瞭なる意識を以て捉へられ極めて深き鋭き思索によつて取り扱はれた。私は今花も實も見事に揃つたこの豐かな思想の庭園を素通りしなければならないのを遺憾とする。

プロティノスの歷史的影響は廣く强く深くあつた。世界の最も偉大なる詩人のうち二人まで、卽ち或意味に於てはそれ〴〵中世と近世との精神的代表者であるダンテとゲーテとが、間接に直接にかれの思想にはぐゝまれておひ立つたことや、アウ

グステイスよりヘーゲルに至るまでの形而上學殊に宗教哲學が、かれの哲學の、乃至はかれを通じてギリシア哲學の弟子であつたことなどは、今日は多くの人々に知られてゐるであらう。幾分意外の感を與へるであらうのはカントである。しかもプロティノスなしにカントを考へることは到底不可能である。これは、プロティノスの影響のもとにあつた形而上學を破壞しようとしたといふ消極的の意味に於てのみではない。カントの哲學と世界觀と――殊に世界觀――の中心に立つ諸思想のうち、例へば超感覺的世界と感覺的世界との區別の如き、認識の理想として其の批判の最高規範をなした直觀的悟性のイデーの如き、單に內容に於てばかりでなく言葉に於てさへ、明にプロティノスの影響を物語る。

かくまでの歷史的影響は勢ひわれ〳〵をして更にこの大思想家の超時代的典型的意義に思ひ及ばしめる。プロティノスの宗教哲學は其の本質に於て形而上學、卽ち眞の實在を對象とする理論的乃至學的考察であつた。この立場に於ては哲學の對象は宗教のそれと全く同一である。さて哲學も宗教もともに同一對象に向ひ等しく眞理であるを主張する以上、兩者の關係は次の三つのいづれかでなければならぬ。第一は兩者が全然一致するといふ場合である。吾々は之をプロティノスの「ヌ

ース」の思想に於て發見する。第二は宗教的體驗が認識の自己完成といふ意義を發揮する場合である。われ〳〵は之を「ヌース」の思想、しかし特に「一者」の思想に於て發見する。かつ第一乃至第二はプロティノスの影響の下に立つ中世以來の神祕家、乃至神祕的傾向の思想家の間に廣く行はれる。其の最も雄大なる、世界史的意義ある表現はダンテのParadisoである。第三は宗教が低級な哲學、間に合せの認識に過ぎないといふ場合である。吾々は之をすでにプロティノスに於て、しかし特に、古今に亙つて廣くかれの多數の弟子たちの間に發見する。それはこの傾向の思想家が民間の宗教――固有の意味に於ける宗教に對して取る普通の態度である。これら三者は各特色はあるが、宗教と哲學と從つて認識とが根本に於て同一であるを主張する點に於ては相一致する。形而上學としての宗教哲學は理論を人生の心髓其の最高價値と認める主知主義（Intellektualismus）の零圍氣のうちにはじめて發育し得る。この主知主義こそギリシア思想の極めて著しき特徴であり、この立場に立つ宗教哲學こそカントの出現に至るまで千數百年の思想の歷史を支配した大勢力であつた。しかも宗教の特異性――生の獨立なる一領域としての宗教の固有の本質を否認する點に於て、其は宗教の學的理解としては根本的に態度を誤つたものといはねばな

らぬ。

宗教哲學に於ても新しき時代はカントによつて開かれた。尤も私は宗教に關してカントが說いて居る所、かれの宗教哲學の事實的內容が悉く乃至大部分に於て新しき精神を忠實に實現して居ると認めるものではない。かれのこの方面の論述は比較的不完全であり、啓蒙時代の過去の思想の惰力に著しく支配された部分に屬する。然しながら宗教に對しても取るべきである新しき哲學的態度は原則としてはすでにかれに具はつて居る。すなはち、かれに於てはじめて、宗教哲學は宗教の對象である絕對的實在を等しくわが對象とする學卽ち形而上學ではなく、宗教其もの—個人によつて體驗され歷史の一勢力としてはたらき、しかして固有の內容を有する生の一領域として存在する宗教其ものゝ哲學的硏究であるといふ新しき意義を得た。このことは取りも直さず宗教の特異性と獨立性との尊重を意味した。彼自らの有名な言葉の示すが如く、かれは信仰の權利を承認する餘裕を保留する爲めに知識卽ち形而上學の僭越を抑制したのである。宗教の權利は神の存在や本質などに關する理論的論議の價値如何に依屬しない。主知主義は宗教に對して好意的態

度を取る場合に於てさへ、其の精神に於て乃至歸結に於て、むしろ宗教の否定である。宗教を放追したり又は其の領土を占領したりなどする哲學ではなく、宗教の自主權を尊重し、私心を去つて對象其ものゝ言はうとする所に懇に耳を借し其の研究に深く沈潛する哲學――眞正の意味に於ける宗教哲學はかくしてカントに由てはじめて可能となつた。

しかもこのことは決して單に偶然なる僥倖的なる副產物ではなく、むしろかれの哲學の根本的精神の必然的發現であつた。すなはち、事實と存在との世界に對して其と離し難き親密なる關係に立ちつゝしかも其よりの獨立性を保つ意味、價値、規範の世界、Gelten の世界の承認――かれの最も偉大なる功績の屬するこの獨創的新發見に由て、かれは哲學の對象が超感覺的實在でなければならぬやうに考へ來つた古來の謬見を破り、また同時に理論と認識とを人生の唯一乃至最高の價値とするギリシア的人生觀に打勝ち得た。理論的ならぬ諸の價値の世界はいづれも哲學のふさはしき對象として、おの〳〵自主權を有する獨立國として、かれの心眼の前に展開された。哲學の對象としての美の世界をはじめて發見したかれが新しき眞の意味に於ける宗教哲學の基礎を置いたのは深き理由のあることである。

しかしながらカントはかれの哲學の固有の精神を十分に貫徹し得なかつた。かれは形而上學より宗教を解放したものゝ、又原則としては宗教の特異性を承認したものゝ、實際は宗教を道德の手段又は附屬器官と見做す偏見を脱し得なかつた。新しき時代を劃したかれの哲學の新しき態度を明瞭なる自覺を以てはじめて宗教に適用したものは實にシュライエルマッヘルである。かれは一方に於て、宗教的體驗の自主權を極力主張し、宗教と生の他のはたらきとの混同を斥けつゝ、またカントに於てはまだ取り去られずにあり然かも主知主義の宗教哲學の通弊であつた傾向――宗教の個體的具體性を輕視又は無視する傾向を全く克服した。かく宗教の特異性と具體性とを力强く肯定したかれは、しかも他方に於て、事實の世界には留らなかつた。かれが關心の中心に置き最も重要視した所のものは、宗教的體驗の意味と價値との解釋及び理解、宗教の本質と眞理性との問題であつた。私は今これ以上に深入するを許されない。今はたゞ、宗教哲學――單なる心理學ではなく哲學であり、しかも宗教其ものを對象とする、眞の正しき意味の宗教哲學はカントとシュライエルマッヘルとを出發點とせねばならぬこと、其は宗教的體驗の事實より出發し又絶えずその事實と交渉を保ちつゝ、しかも事實性より獨立なる意味の世界、事實を意味附

ける價値の世界をわが特有の領土と見なければならぬこと、を高調するに止めよう。

さてしからば、プロティノスの哲學乃至はそれによつて代表される宗教形而上學は全く無用となつたであらうか。私は「否」と答へる。宗教的體驗の最も著しき本質的なる特質は、其が超感覺的超經驗的絶對的實在と關係することである。かくの如き實在は生の他のいかなる領分に於ても對象として與へられない。道德も美的生活も固有の領土を純然たる意味の世界に有し、存在と關係する限に於ては、その存在は經驗的現實界の範圍を出でない。認識に對して與へられる實在は常に感覺的である。經驗を離れては吾々は實在的なる何ものをも認識し得ない。超經驗的であつて而も認識し得られるものは、存在するものではなく妥當するもの（gelten）するものゝみである。絶對的實在といふ概念が理論の國に住居を許されるならば、それは論議と思索とのはてのはて、はじめて達し得られる境界線に於てゞある。其はイデー乃至は限界概念としてのほかの價値を有しない。其は對象として原的に與へられるものではない。然るに宗教に於ては順序が全く逆になつて居る。すべて感覺的なるものはそこでは從屬的又は消極的意義しか有しない。それは或は不確實なるもの或は劣等なるもの或は否定せらるべきものである。之に反して超越的絶對的

實在は最も確實なるもの最も積極的なるものとして原的に與へられる。宗教的體驗にとつては神こそ却つて世界よりも否自己よりも遙かに自己に近く遙かに確實なのである。かゝる實在の概念にあらず其に關する推理にあらず、かゝる實在其ものがそのまゝまさしく體驗されるといふのが宗教の言ひ分である。尤もこの言ひ分は之に對して冷淡である者、又は始めより否認して掛らうとする者にとつては、或は不可解の妄言であり、或は途方もなぎ僭越であるかも計られない。しかしながらこの點は他の領分に關しても根本的にいへば大差は無いのである。人生のすべての價値は本質上理論的證明を超越し、非合理的であり偶然的である。道德其他の非理論的價値は言ふまでもない、極端に言へば理論的價値其もの眞理其ものさへ否認し拒絶する態度、ゲーテの言葉を借りるならば「常に否定する精神」(der Geist, der stets verneint)は其自身に於ては可能である。其は自由なる人格の特權に屬すると言つてもあながち過言でない。しかしながら一たび宗教の言ひ分を尊重するといふ態度を取つたならば、吾々は生のあらゆる領域意識のあらゆるはたらきのうち、宗教がたゞひとり超越的絶對的實在を體驗すると斷言することが出來よう。眞に形而上學的なる世界の展望は宗教の眼にのみ惠まれる。形而上學的實在の確實性は宗教的

體驗に於てはじめて捉へられる。

宗教のこの言ひ分、この最も本質的なる主張が理論的證明を全然超越するは言ふまでもない。神の存在の證明の破毀はカントの最も大なる功績の一に數へらるべきであらう。この事情のもとに宗教哲學は次の二種類の任務を課せられる。第一に、吾々は人格の最高の特權であり又義務である生の肯定――生の意義の肯定、從つて生の眞の諸價値の肯定と宗教の本質的主張とを結び附けて、兩者の間の必然的な連絡を示すことは出來よう。この連絡は勿論事實のそれではなく意味のそれである故、其の考察論究は吾々がすでに說いた宗教哲學の責任の範圍に屬する。若しこの事が成功したならば、宗教の眞理性の哲學的に可能なる唯一の基礎附けを成し遂げ得たことに當る。さてこゝまで進んで來た宗教の哲學的研究は理論哲學の方面に於ける認識論に當るものであるが、吾々はこゝで停止せず、むしろこゝを出發點として今一歩を、形而上學と昔より呼びならはしたものに該當する所の研究に向つて進め得ようと思ふ。吾々は宗教を單に生の一領域意識の一活動として取扱ふばかりではなく、其が主張する對象、絕對的實在其ものゝ思想を捉へて之を考察の題目とする。吾々は其の內容を概念的に規定することを力める。吾々はまたすべて存在

するもの現實的存在者の全體從つて世界殊に人生を其と關係せしめることに由て、宗教的と名くべき世界觀の體系を展開する。この際われ〳〵は、絶對的實在はたゞ宗教的體驗に於てのみ與へられるものであることを、從つてかくの如き形而上學は、理論的論議として行はれるも、しかも宗教的體驗の眞理性の前提のもとにはじめて成り立つのであり、徹頭徹尾その體驗の意味の解釋といふ意義を保有することを特に明に記憶に留め置かねばならぬ。宗教的體驗の妥當性は勿論純理論的證明に由てはじめて成立するものではないが、しかも批判哲學としての宗教哲學は、之を本質上等しく皆非理論的なる他の價値的體驗の妥當性と結び附け、共に携へて理論の法庭に進み出で其の言ひ分の辯明を試みることによつて、理論的考察の對象となすことは出來る。しかるにこの形而上學は體驗の妥當性は問題とすることなく、むしろそれを前提した上にて體驗の內容其ものを論究の出發點及び對象とする。從つて宗教其者を對象とする眞正なる最も本源的なる意義に於ける宗教哲學、卽ちさきに認識論に該當すると言つた批判的宗教哲學はこの形而上學の動かす可らざる基礎をなさねばならず、逆に言へば、この形而上學は哲學としては第二次的派生的地位に甘んせねばならぬ。しかしながらこの本質的制限を自覺した形而上學、從つて批判

的と名くべき宗教形而上學はカントの開拓したる地盤に發育し得又しかなさなければならぬ。これが私の信ずる所である。

かく考へる時吾々は振り返つて再びプロティノスに眼を向くべく促される。かれの哲學乃至はかれより發した宗教形而上學は果して無價値として排斥せらるべきであらうか。哲學と宗教との混同を招いたギリシア風の主知主義、其と關聯して認識論上の獨斷主義は之を擲つとしても、プロティノスの宗教哲學が體驗と親密なる關係を有し、理論的論議である限に於ては體驗內容の解釋其の體系的展開といふ意義を有したことを思つたならば、無下には棄て難く感ぜられる。尤もかれの思想と論議との具體的內容を一々檢査しないではこの問題の滿足なる解決は望まれないが、今假りに私の所信を大膽に明白に吐露する自由を許されるならば、私はこゝにプロティノスの哲學の現代に於ける價値と生命とを力强く肯定したいのである。かれより出た廣い又深い影響、宗教形而上學者としてのかれの占める優越なる典型的なる歷史的地位は第一にこの事を要求する。次にかれの說いた思想かれの論じた問題には永遠的意義を有するものが少くない。それらのうち或るものはすでに前に述べたが、今宗教哲學の見地より見て重要なるものゝうち他の一例を擧げるな

らば、それは「永遠」(ho aiōn, Ewigkeit)といふ思想である。この思想は、徹頭徹尾時のうちに動く經驗的現實界に對しては、この特質を否定する消極的意義しか有しない。意味と價値との世界に關しては、其の固有の特質たる超時間的妥當性を表はすものとして積極的の意義を有するが、そのかはり存在を切り去らねばならぬ點に於てはなほ一面的消極的を免れない。宗教的體驗に於て其ははじめて眞に積極的なる、內容の充實したる、眞の意義を發揮する。其は單に時に於て限無く延びる存在ではないが、又單に時より獨立なる妥當性にも盡きない。宗教的體驗の境地に於ては價値と實在當爲と存在、意味と事實との分離は全く超克される。兩者の完全なる合一こそ宗教的對象の特質である。絕對的實在が同時に絕對的價値であり、それ以上を求め得ざる無限の內容を湛へ、從つて「すでに」とか「いまだ」とか「まさに」とかなどいふ規定が全く意義を失ふ絕對的完成が成し遂けられ見出される所に「永遠」ははじめて成り立つ。この「永遠」は單に時間的存在よりの獨立ではない、其自身實在であり又すべての時間的存在に對して或は根元或は目的或は制約である。宗教に於てはじめて出會ふ——しかもそこでは思惟の要請やイデー(理念)などゝしてゞはなく、まがふ可くもない體驗內容としてまさしき事實として出會ふ——この「永遠」を概念的に學的には

じめて明にしたのはプロティノスである。

尤も批判的宗教哲學の基礎の上に建設せらるべき宗教形而上學に關聯して種々の問題が湧き出ることを吾々は覺悟しなければならぬ。「生と認識と」といふ問題の如き、宗教の本質と其の個性との關係の問題の如き、一二の例である。要するに決して容易な業ではない。然しながら困難の大なるだけに報も亦小さくないことは期待すべきである。若し幸にしてかくの如き宗教形而上學が成功するならば、哲學は獨斷主義に陷らずしてしかも世界觀の學としての古來の光輝ある傳統に副ひ得るであらう。哲學は生と極めて親密なる關係を結び、生に養はれつゝ生を富まし、生を支配しつゝ生に奉仕するであらう。宗教哲學のこの大任がカントとプロティノスとの綜合に由てはじめて果されるといふのが私の確信である。かくの如き綜合は或意味に於てはすでにカント自身にも見られるが、其の最も大規模なる試みはヘーゲルの哲學である。かれの宗教哲學をカント以前のそれと比較し、其が神に關する考察よりはじまらず、宗教の概念卽ち其の本質に關する詳細なる論議にはじまり又かゝる論議より成り立つて居ること、Phänomenologie des Geistes に於てかれが意識の全體系に於て宗教の占むべき必然的位置を明にするを力めたことを見たならば、カン

ト前の形而上學とかれのそれとの間に存する根本的差異は一目瞭然であらう。且かれが若い時シュライエルマッヘルの宗教論に動かされたことはDiltheyの研究によつて明にされた所である。しかしながら種々の事情、殊にギリシア思想の影響のもとにますゝかれの精神を支配した主知主義はかれを誤つた道に誘つた。今日の宗教哲學の任務はかれのと同じ事業を正しき方法を以て成し遂げる以外には存しない。プロティノスとカント――哲學的に特に惠まれたギリシアとドイツとの兩文化を代表するこれら二大思想家の精神と業績とによつて肥された地盤に、宗教の哲學的研究ははじめて豐かな實りを擧げ得るであらう。